公益財団法人 日本野鳥の会
Wild Bird Society of Japan

探鳥会スタッフ通信

2014年
4月号

日本野鳥の会80周年

「探鳥会スタッフ通信」は、探鳥会の考え方や様々な運営手法について、全国の連携団体の探鳥会リーダーの皆様と情報交換を行うための通信です。

目 次

◆私たちの探鳥会自慢
「地元新聞に探鳥会報告を連載している探鳥会」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
◆トコロジストになろう
「トコロジストとは」・・・・・・・・・３
◆マナー問題の事例
「北海道根室市内のタンチョウ生息地における事例」・・・・・・・・・・・・・・・・・５
◆探鳥会保険集計結果
（2014年2月分）・・・・・・・・・・・６
◆普及室からのお知らせ
・速報！「探鳥会リーダーズフォーラム」を開催します・・・・・・・・・・・・・・・・・８
・『フィールドガイド日本の野鳥』増補改訂新版の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・８
・探鳥会スタッフ通信を支部のＭＬに転送していただけませんか・・・・・・・・・・・・９
◆今月の購読者数・・・・・・・・・・・１０
◆探鳥会スタッフ通信の購読について・・１１
◆編集後記・・・・・・・・・・・・・・・１１

◆私たちの探鳥会自慢

高知支部では、定例高知城探鳥会の結果を活用し、地元新聞に連載を行っています。その宣伝効果は大変大きく、探鳥会には新聞連載を読んだ非会員の方が多く訪れています。

「地元新聞に探鳥会報告を連載している探鳥会」

■定例高知城探鳥会のはじまり

定例高知城探鳥会は、高知支部で初めて取組んだ定例の探鳥会。今から２４年前の１９９０年１２月に第１回が開催されました。それから回を重ねて、この３月で２８２回を数えています。

始めたきっかけは、大阪から転勤で高知に越して来られた会員さんの「私の地元でもやっている定例の探鳥会を、高知でもやりませんか」という一言でした。支部設立が１９８４年ですので、６年も経ってやっと始まった定例探鳥会ということになります。それまでも通常の探鳥会はずっと実施していましたが、いずれもその季節に応じた場所を設定したもので、それはいわば「鳥の都合に合わせた探鳥会」でした。

「人の都合に合わせた探鳥会」を始めるにあたり、場所と開催時間は「来る人が、車を使わなくても来られる場所と時間に」ということで、バスや電車の便の良い高知城公園で毎月第２日曜日、探鳥会としては遅めの午前９時から開催することに決定。高知城追手門南側の「丸の内緑地」に集合し、約２時間いつも決まったコースを歩くことにしました。決まったコースを歩くのは、きちんと継続した観察記録を残すためです。もちろん、遅刻早退も自由です。

▲高知城

▲定例探鳥会のコース

■昨年から地元紙への連載を開始

さて、昨年の４月からこの定例探鳥会の探鳥会報告を地元紙・高知新聞に連載しています。連載に至った簡単な経緯は次のとおりです。

掲載している紙面は「土曜ネイチャー」という毎週土曜の朝刊の企画物。この企画を始めるに当たり、担当の編集委員さんが「ネタ」探しをしていて、「高知市のど真ん中の高知城で、２３年間も続いている探鳥会とは、いったいどんなものなのか？」と興味を持ってくれたのがきっかけでした。

高知新聞の県内シェアは約７割。支部としてもその宣伝効果に期待し、連載を引き受けました。

新聞一面の半分程度のスペースに「野鳥の楽園・高知城」と題し、字数にして１２００字程度。写真を１～２枚、毎回掲載しています。

高知支部で受け持っているのは、毎月第４土曜日掲載分。他の土曜は高知の海で水中写真を撮影されている方など、それぞれ分野の違う３名の方が担当されています。高知支部担当分の執筆は支部役員３名によるローテーションを組んでいますので、３ヶ月に１回お鉢が回ってくる計算です。

■連載の内容

探鳥会報告の内容ですが、昨年の２月ごろから編集部と何度か話し合い、次のようなことを盛り込んで書くことになっています。

１．探鳥会は、会にとってどのようなメリットがあるのか、２３年間続いているという長続きする運営のコツは何なのか。また支部の活動自体が長く継続している秘けつは。高知支部の歴史、高知城探鳥会以外のいろいろな活動や、どんな人々が、どんな思いで集まっているのか。

２．郊外でなく、日曜日の午前中に街中の高知城で開催していることの意義、メリット。また高知城公園の公園管理の在り方。やぶを残しておいて欲しいのに全部刈り取ってしまっていることや、落ち葉を根こそぎ回収しているが、落ち葉にも大切な意義があること、木の枝を切りすぎて困っていることなどの指摘も可。

３．毎月の探鳥会の様子は、必ず盛り込む。現場に出たら発見が必ずあるので、例年通りの結果だったとか、いや、この時期には珍しく、こんな鳥も来ていたとか。それについて自分はどう思ったとか。参加者はどう反応したとか。
次回はこんな鳥を見ることができるのではないかと予測も。次回にその予測が当たったか、あるいは外れたか、うれしい誤算があったのか等、連載ならではのつながりも書いていける。

４．鳥だけでなく、参加している人についても書く。途中で帰ってもＯＫ、毎回来る常連さんだけど会員にはならない人、観光客がそのまま一緒に合流して探鳥することなど。飛び入りでこんな人が一緒になって、こんな楽しい時間があったとか。ズバッと批判せず、探鳥会参加へのマナーをそれとなく書いても良い。

５．この連載を通じて「へー、お城の探鳥会は結構、面白そうじゃないか」ということを、一般の方に広く分かってもらえるような紙面にすることを目標にする。

■連載の効果

新聞連載を始めた当初に予想された、会員外の参加者数の増加は、この３月の実績で参加者３８名中２９名と、参加者の７５％を会員外の方で占めるようになりました。

支部では、これまでもラジオや新聞等で探鳥会の広報をしてきたつもりでしたが、こちらが思っているほど知られてなかったことも判り

ましたし、これがうまく会員の増加につながっていければ良いと考えています。

探鳥会に来られた方からは、

「双眼鏡や望遠鏡で見る鳥の姿が、あまりにきれいなので、びっくりした。」
「双眼鏡を購入する良いきっかけになったし、参加している人のいろいろな双眼鏡をお借りして、実際に見比べることができるのが、すばらしい。」
「第２日曜以外の日、お城を散歩するときにも鳥を意識するようになった。」
「連れてきた子供が興味を持ち、今では逆に子供に連れられて来るようになった。」

などの声を聞くことができました。

▲探鳥会の様子

■今後の展望

ちなみに、これくらいのスペースの紙面に広告を載せるとしたら１回あたり２００万円ほどかかるそうです。編集委員さんからは連載を始めた時、「年に１２回の掲載で、２４００万円の広告費を使うのと同じ効果があるので、来年の４月以降も連載が続くようにがんばって書いてください」と言われていましたが、おかげさまで読者の皆さんにも好評で、この４月から２年目に突入することになりました。

４月からの１年間は「高知城を飛び出して、県内の野鳥の様子を自由に書いてください」と言われていますので、かなり自由度の高い内容のものを毎月掲載できます。

執筆するメンバーは変わらないものの、いろいろな切り口で高知の野鳥について紹介していくことができるので、日本野鳥の会で取り組んでいるツバメの調査なども盛込みながら、より良い紙面にしていきたいと思っています。

なによりも、「定例高知城探鳥会は、この１年間で市民権を得た」と高知新聞の編集委員さんに言われたことが一番で、今後の励みになります。

高知支部では、これまで野鳥の密猟対策などに取り組み、普及啓発に係る活動にはあまり熱心ではなかったということもあり、今回のことを契機に新たな動きを模索していきたいと思っています。

（高知支部支部長／ 西村公志）

◆トコロジストになろう

第１回「トコロジストとは」

今年の２月 15 日に「トコロジストの集い」という勉強会が神奈川支部の事務所で行われました。（先月号に報告を掲載）

この勉強会に参加して、日本野鳥の会は地域の自然を見守るトコロジストの集まりである、という思いを強くしたと同時に、そのことをもっと外に向けて発信していくべきだと思いました。

そこで、今月号から「トコロジストになろう」という新連載を開始し、支部で活躍している様々なタイプのトコロジストたちを紹介していこうと思います。

連載を通して、トコロジストという言葉が皆さんにとって身近な言葉になってくれれば幸いです。

今月は連載の第１号として、トコロジストの語源や意味についてお伝えします。

■トコロジストとは

みなさんは普段どのように鳥を見ることを楽しんでいますか？おそらく楽しみ方としては、大きく二つに分けられるのではないかと思います。

ひとつは、いろいろな場所に鳥を追いかけていく楽しみ方。今週は里山、来週は干潟、その

次は山へという具合に鳥のいる場所を求めて飛び回るというパターンです。

もうひとつは、家の近くのどこかーか所を自分のフィールドに決めて、そこへ足繁く通い観察するというパターンです。

トコロジストとは、このうちの後者の楽しみ方を推奨し広めようという言葉です。

意味としては、場所をさす「トコロ」と、～をする人という意味の「ジスト」をくっつけて、「ある場所の専門家」。どこかーか所、自分のフィールドを持って、その場所に足繁く通い、そこのことなら何でも知っている、という人のことを指します。「〇〇公園のトコロジスト」「〇〇山のトコロジスト」といった使い方をします。

この言葉を生みだしたのは、元神奈川支部長だった故浜口哲一先生です。浜口先生は、平塚市博物館の学芸員であると同時に、神奈川支部での活動を通して、県内の自然保護活動に遁走されてきました。その経験から、自然や地域との関わり方のひとつとして「場所の専門家」という考え方が必要だと考えるにいたりました。そして、これによい名前を付けたいと、仲間うちに呼び掛けたところ、同じ神奈川支部の幹事だった田端裕さんが「トコロジスト」と提案されて、2005 年ごろにこの言葉が生まれたのです。

■なぜこの言葉が生まれたのか

浜口先生はなぜこの言葉（考え方）を考案し、広めようと考えたのでしょうか。その理由の一つは、環境保全における市民の役割の重要性を訴えたかったからだと思います。

「専門家」という言葉は、一般的に野鳥の専門家、植物の専門家、歴史の専門家という具合に、既存の学問分野に詳しい人のことを指しています。

しかし、実際にある場所を保全しようとすると、特定の分野の専門家の見識だけでは不十分です。実際にその場所に通いつめて、この場所のことは、生きものも地質も歴史も文化も含めていろいろなことを知っているという、「その場所の専門家」の見識が重要になってきます。

これまで当会が関わってきた自然保護問題をみても、その場所を一番歩いて見ている支部の方々が、まず小さな異変を発見し、証拠を集めながら声をあげ、そのうちに様々な専門家と連携しながら自然保護をすすめるというパターンが多かったのではないでしょうか。

ところが、そうした地域の保全の現場では、得てして「分野の専門家」に比べて、「場所の専門家」はどこか軽く見られる傾向があるのではないか、場所の専門家に位置づけを与えて、分野の専門家と同じくらいの重みづけをする必要があるのではないか、浜口先生はそう考えたのです。

当時 2000 年代の初頭には、世の中は BSE 問題に端を発して、それまでの科学者や役所の専門性に大きな決断をゆだねることへの疑問の声が出始めていました。既存の専門性やシステムを監視する市民のあり方についても様々な議論が展開されていたのを思い出します。

これは私の想像ですが、おそらくこうした時代背景もあって浜口先生は、市民がもつべき専門性として、トコロジストという考え方を発想されたのではないかと思っています。

■土地から離れてしまった現代人

現代は情報化社会。どこにいても携帯やメール、ツィッター、フェイスブックなどで気軽にコミュニケーションがとれる時代になりました。これは一面では、住んでいる場所の制約を受けなくなったという言い方もできるかもしれません。

しかし、その一方でコミュニティや土地への愛着といったものは世代ごとに薄れていき、人と土地との乖離が加速しているような気がします。

「トコロジストになろう」という呼びかけは、土地と離れてしまった現代人に「自分のフィールドを持って、その場所を見続けよう」ということを訴えています。そうすることで、一度離れてしまった人と土地との関係をつなぎ直そうとしているのです。

一方、支部で連綿とおこなってきた定例探鳥会もこれと同様。一年を通じて同じ場所で開催することで、その場所のコミュニティをつくっていると考えることができます。そうやって人と人、人と場所との関係を結び直しているのではないでしょうか。

次号からは、具体的に支部の方々に寄稿していただきながら、トコロジストについてもう少し具体的に考えていきたいと思います。

（普及室　箱田敦只）

◆マナー問題の事例

「北海道根室市内のタンチョウ生息地における事例」

【キーワード】地元住民への迷惑行為、希少種、地権者の協力、地元住民同士による解決

10 年ほど前、北海道根室市内のタンチョウ生息地で発生した事例をご紹介します。

その生息地は、1987 年に日本野鳥の会が購入し、野鳥保護区を設置した、湿原約７ヘクタールのタンチョウが繁殖する湿原です。内湾のため、近年は湿原が浸食され、面積が極端に狭くなりました。

野鳥保護区の南側には、交通量が多い国道があり、一段高くなった歩道があります。西側には、私道の砂利道があり、さらに西側に、個人（A 氏）が所有する空き地があります。

野鳥保護区設置後、浸食されるにしたがい、ヨシ原の面積が徐々に減少してきました。それにともない、タンチョウの営巣地も北側から、南側に移動し、国道から丸見えになってしまったのです。

営巣中のタンチョウや、孵化後の親鳥とヒナの写真が撮れるとの情報が出回り、多数の野鳥撮影者がやってくるようになりました。やっかいなのは、この撮影者が国道の歩道上に、三脚を広げ陣取ってしまったこと。タンチョウへの影響もやっかいなのですが、迷惑をしたのは、歩道を学校へ通う小学生や地元の方。撮影者を避けるために、一段高くなった歩道から、車道に降りて歩くことになってしまいました。

当会の職員から、撮影者に、一か所に固まらないように声をかけましたが、ヨシの隙間から上手く撮影できるポイントは限られているようで、いたちごっこでした。その状況を見ていた、野鳥保護区の西側の土地所有者である A 氏が、自分の所有地の空き地を使って良いと申し出てくれました。その後、撮影者は、その空き地に自動車を止めて、ゆっくりと撮影できるようになり、小学生や通行人は、安全に通行できるようになりました。

また、西側の砂利道より営巣地側には近寄らないというルールが、撮影者の間でできあがり、国道の歩道上で撮影したり、砂利道よりも近づいて撮影する人には、撮影者同士で声をかけて注意する環境ができあがりました。

もちろん、営巣中や育雛期は、当会の職員が巡回監視をし、無茶な撮影をしている方には、マナーを守って撮影するようお願いをしています。

この事例のポイントは、撮影者が、地元住民に、交通の障害になるという迷惑をかけたこと。国道上なので、本来であれば、道路管理者の北海道開発局（国土交通省）や警察を巻き込んだ問題になるのですが、問題が大きくなる前に、地元住民が問題を解決するために動いていただけたことです。

（普及室／富岡辰先）

◆探鳥会保険集計結果（2014 年2月分）

2月は 65 支部からご報告をいただき、計 235 回の探鳥会が開催され、のべ 4,817 人が参加されました。

表1．2月の探鳥会保険集計結果（2014 年3月 15 日現在）

支部	開催回数（回）	参加者数		スタッフ数（人）	合計人数（人）
		会員（人）	非会員（人）		
小清水	−	−	−	−	−
オホーツク支部	2	23	8	2	33
根室支部	−	−	−	−	−
釧路支部	0	0	0	0	0
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	−	−	−	−	−
旭川支部	0	0	0	0	0
滝川支部	0	0	0	0	0
道北支部	−	−	−	−	−
江別支部	−	−	−	−	−
札幌支部	2	40	12	4	56
小樽支部	2	8	4	2	14
苫小牧支部	−	−	−	−	−
室蘭支部	1	24	3	3	30
函館支部	−	−	−	−	−
道南桧山	1	9	2	2	13
青森県支部	−	−	−	−	−
弘前支部	2	14	0	2	16
秋田県支部	5	54	9	5	68
山形県支部	2	16	1	2	19
宮古支部	−	−	−	−	−
もりおか	1	5	4	4	13
北上支部	−	−	−	−	−
宮城県支部	3	34	7	7	48
ふくしま	1	29	1	2	32
郡山支部	1	13	0	3	16
二本松	0	0	0	0	0
白河	0	0	0	0	0
会津支部	−	−	−	−	−
奥会津連合	−	−	−	−	−
いわき支部	1	17	0	1	18
福島県相双支部	−	−	−	−	−
南相馬	−	−	−	−	−
茨城県	6	74	17	8	99
栃木	−	−	−	−	−
群馬	6	58	26	13	97
吾妻	0	0	0	0	0
埼玉	11	222	43	73	338
千葉県	10	109	19	41	169
東京	13	405	12	58	475
奥多摩支部	11	116	7	31	154
神奈川支部	11	135	26	40	201
新潟県	1	16	1	2	19
佐渡支部	−	−	−	−	−

富山	2	25	2	2	29
石川	2	40	3	5	48
福井県	1	11	2	1	14
長野支部	1	7	5	2	14
軽井沢支部	0	0	0	0	0
諏訪	0	0	0	0	0
木曽支部	–	–	–	–	–
伊那谷支部	–	–	–	–	–
甲府支部	1	24	0	2	26
富士山麓支部	0	0	0	0	0
東富士	–	–	–	–	–
沼津支部	1	6	1	2	9
南富士支部	2	51	7	3	61
南伊豆	1	10	0	2	12
静岡支部	4	23	2	6	31
遠江	5	81	18	13	112
愛知県支部	12	114	137	29	280
岐阜	–	–	–	–	–
三重	4	24	12	6	42
奈良支部	4	87	1	8	96
和歌山県支部	1	1	4	3	8
滋賀	5	53	20	10	83
京都支部	8	118	35	17	170
大阪支部	18	283	70	74	427
ひょうご	6	93	36	22	151
NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	3	14	4	3	21
島根県支部	2	16	2	2	20
岡山県支部	6	119	50	17	186
広島県支部	6	48	59	6	113
山口県支部	5	37	20	6	63
香川県支部	2	65	12	3	80
徳島県支部	5	52	8	5	65
高知支部	–	–	–	–	–
愛媛	5	48	76	9	133
北九州	3	60	6	3	69
福岡支部	7	140	41	14	195
筑豊	2	21	3	2	26
筑後支部	4	24	3	4	31
佐賀県支部	3	43	20	3	66
長崎県支部	–	–	–	–	–
熊本県支部	5	63	14	6	83
大分県支部	1	16	9	2	27
宮崎県支部	2	10	10	2	22
鹿児島	3	43	22	11	76
やんばる支部	–	–	–	–	–
石垣島支部	–	–	–	–	–
西表支部	–	–	–	–	–
全国	235	3,291	916	610	4,817

備考：-は保険の申請がなかったことを示しています。

（普及室）

◆普及室からのお知らせ

■速報！「探鳥会リーダーズフォーラム」を開催します■

来年２月７日（土）～8 日（日）に、全国の探鳥会リーダーを対象に、「日本野鳥の会探鳥会リーダーズフォーラム」を開催します。このフォーラムでは、日ごろ探鳥会活動の最前線に立って活躍されているリーダーの皆さんが一堂に会し、１泊２日で顔を合わせて、支部のこと、探鳥会のこと、野鳥のこと、地域のこと、自然保護のことなどさまざまな話題で交流しようというものです。

「今の探鳥会のやり方に自信がなくなってきた。」「他の事例を知りたい。」とう方、逆に「自分のやっている事例を他の支部の人にも聞いてもらいたい。」という方この機会に是非どうぞ。

また、普段肩身の狭い思い？をしている女性リーダーや若手リーダーの皆さんは、同じ立場で活躍されている方々と出会うチャンスです。この機会にぜひご参加ください。

詳細は ９ 月ごろにお知らせできる見込みですので、各支部に置かれましても、２月７日、８日への心づもりをお願いいたします。

＜開催概要＞
【日時】2015 年２月７日（土）13 時 00 分～8 日（日）12 時 00 分
【会場】八王子セミナーハウス（東京都八王子市）
【募集人数】50 名程度
【お問い合わせ】(公財)日本野鳥の会 普及室（tancho-staff@wbsj.org）

■『フィールドガイド日本の野鳥』増補改訂新版の取り組み■

支部ネット通信３月号で「分類の変更と『フィールドガイド日本の野鳥』改訂の進捗」を掲載させていただき、「文献の変更も視野に入れて６月前に発行できるよう…」と書きました。が、その後の検討では「ウェブ上の資料はあるがそれらは暫時変わるので、参考文献には適さない。研究者からも信頼されてきた『フィールドガイド日本の野鳥』なので、『The Howard and Moore Complete Checklist of the Birds of the World』のスズメ目の完成を待つべき」という意見が趨勢を占めています。同書は完成が遅れ、世界中で図鑑の著者や研究者が待たされているようなので当会はすでに予約済みですが、今のところ６月初旬刊行とされています。

お待たせして申し訳ありませんが、新しい分類に準拠した『フィールドガイド日本の野鳥（増補改訂新版）』は同書の完成後、それを元に世界の種数、科ごとの種数などを書き加えてからの発行となりそうです。そこでお詫びを込めて、新たな『フィールドガイド日本の野鳥』がどんなものになるのか、概要や進捗を支部ネット通信と同様に紹介していくことに致します。

■なぜ『フィールドガイド日本の野鳥』なのか？

まず、野鳥誌や当会ホームページで紹介してきたおさらいをさせて下さい。1982 年に発行された本書は、アジア初の分布図も入った本格的フィールドガイドとして世界的に評価されただけでなく、私たちの識別能力を向上させ、国内の鳥類の記録を増やし、その後のアジア水鳥図鑑、韓国や台湾などの図鑑の元にもなりました。より多くの種を扱う図鑑や、仲間ごとにより詳しい図鑑も発行されるようになった今日でも、識別の方法や心得をはじめとした基礎的な解説、比較しやすく、わかりやすい図版や並べ方など、総合的に優れていると思われ、多くの研究者やベテランたちが手放さずに使っています。

■なぜ『増補版改訂版』なのか？

著者高野伸二の没後、1989 年、当時当会にあった野鳥記録委員会による検討を元に増補版が発行されました。2000 年には日本鳥類目録改訂第６版が発行され、さらに新たな情報や知見なども加味せざるを得なくなって、2007 年に増補改訂版の発行となります。高野伸二を

支えた御奥様、ツヤ子さんと相談して増補改訂を担当することになった私は、増補版同様に高野著作を引き継ぐ方針の一方で、当会オリジナル書籍として欠けていた２点を改良しました。「はじめに」で柳生博会長に 1934 年に中西悟堂が当会を創設した歴史や考え方を語らせ、「まえがき」に続いてフィールドマナーを囲みで掲載しました。

それまでの鳥類目録改訂第５版から改訂第６版に準拠させる作業は、ガンカモ目がカモ目、ワシタ科がタカ科になるなどの目名や科名の変更のほか、ヒタキ科に含まれていたツグミ亜科やウグイス亜科が独立して科となったり、亜種とされていたリュウキュウコノハズクやウチヤマセンニュウが種になったり、なんとか書き直しが可能な範囲でした。ただ、新たに観察、記録された種が数多かったので、どのような考え方によってどの種までを追記すべきか？についてはかなり悩みました。その結果は、今回の『増補改訂新版』の取り組みにも活かされていますので、次回で新たな分類変更への対応とともに述べる予定です。

▲『フィールドガイド日本の野鳥』歴史的４冊
（左から、初版、英文版、増補版、増補改訂版）

（普及室／安西英明）

■探鳥会スタッフ通信を支部のＭＬに転送していただけませんか■

昨年 ４ 月から開始した探鳥会スタッフ通信ですが、現在の登録人数は 657 名。今後、もっとたくさんの探鳥会リーダーにお読みいただきたいと思っています。

そこで、本通信を、支部でお持ちのメーリングリスト（ML）に転送可能な方は、転送をお願いできませんか。また、普及室では購読者の正確な人数を知りたく思っています。ML に転送いただく場合は、併せて ML 登録人数を教えてください（tancho-staff@wbsj.org）。

次項に支部ごとの登録人数の表があります。既に支部の ML に転送してくださっている方で、数字が表に反映されていないと思う方は、tancho-staff@wbsj.org まで、お知らせください。

（普及室／堀本理華）

◆今月の購読者数

探鳥会スタッフ通信４月号の電子メール版の購読者数は 657名です。支部ごとの登録人数は以下の通りです。

表２. 探鳥会スタッフ通信４月号電子メール版の購読者数（2014 年４月 22 日現在）

支部	登録者数	支部	登録者数
小清水	0	福井県	10
オホーツク支部	7	長野支部	2
根室支部	0	軽井沢支部	2
釧路支部	2	諏訪	3
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	70	木曽支部	0
旭川支部	4	伊那谷支部	1
滝川支部	1	甲府支部	1
道北支部	1	富士山麓支部	0
江別支部	0	東富士	0
札幌支部	4	沼津支部	3
小樽支部	0	南富士支部	1
苫小牧支部	1	南伊豆	2
室蘭支部	4	静岡支部	2
函館支部	0	遠江	4
道南桧山	1	愛知県支部	33
青森県支部	1	岐阜	2
弘前支部	4	三重	3
秋田県支部	1	奈良支部	1
山形県支部	3	和歌山県支部	2
宮古支部	0	滋賀	18
もりおか	2	京都支部	131
北上支部	0	大阪支部	5
宮城県支部	6	ひょうご	5
ふくしま	2	NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	11
郡山支部	1	島根県支部	2
二本松	1	岡山県支部	23
白河	1	広島県支部	6
会津支部	2	山口県支部	2
奥会津連合	0	香川県支部	3
いわき支部	0	徳島県支部	0
福島県相双支部	0	高知支部	1
南相馬	0	愛媛	14
茨城県	20	北九州	12
栃木	27	福岡支部	12
群馬	23	筑豊	1
吾妻	1	筑後支部	6
埼玉	17	佐賀県支部	2
千葉県	15	長崎県支部	0
東京	42	熊本県支部	0
奥多摩支部	46	大分県支部	2
神奈川支部	9	宮崎県支部	2
新潟県	1	鹿児島	1
佐渡支部	0	やんばる支部	0
富山	1	石垣島支部	0
石川	4	西表支部	1
		合計	657

（普及室）

◆探鳥会スタッフ通信（電子メール版）の購読について

探鳥会スタッフ通信は、支部の探鳥会スタッフならどなたでも購読できます。（無料です）

ご希望の方は、「探鳥会スタッフ通信希望」と明記のうえ、①支部名 ②担当している探鳥会名 ③お名前 ④ご住所 ⑤電話番号 ⑥メールアドレス（パソコンやスマートフォンのアドレス）を記入し、tancho-staff@wbsj.org へお申し込みください。バックナンバーとともにメール版を送信いたします。

配信を希望されない、メールアドレスの変更などについても、tancho-staff@wbsj.org までお知らせください。

★編集後記

穀雨の季節を迎え、静かな雨の日が続いています。

今月号から、トコロジストとマナー問題に関する連載が新たに始まりました。ご感想などお待ちしています。

ご自身の担当されている探鳥会について紹介いただける方、ぜひ tancho-staff@wbsj.org までご連絡ください。

（普及室／堀本理華）

日本野鳥の会
探鳥会スタッフ通信　第１３号
◆発行
（公財）日本野鳥の会　　2014 年4月 23 日
◆担当
普及室　普及教育グループ
〒141-0031
東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル
TEL：03-5436-2622
FAX：03-5436-2635
E-mail：tancho-staff@wbsj.org